

SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

Vol.
126

2026. 11

年間テーマ「今こそ、戦争を未然に防ごう！」



10月18日（日）大阪高松大司教区カテドラルで開催
INTERNATIONAL DAY～外国人が暮らしやすい社会は日本人にも暮らしやすい～

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>



江ノ口教会（高知県高知市） 平和旬間月間行事を振り返って



江ノ口教会主任司祭

いわさき
岩崎

たけし
武 神父

今年、江ノ口教会では平和祈願ミサを行い、その後、平和を願う朗読・黙想会を開きました。原爆を体験した子どもたちの思いや言葉から戦争体験を振り返り、平和への思いを深め、行動につながるよう祈ることを目的とした、初めての試みでした。

子どもたちの詩の朗読と黙想を繰り返し、最後に皆で祈るシンプルな会でした。80年以上の時を経ても、その詩が心に強く響いたことが、参加した信者の皆さんの感想から伝わってきました。

私自身も、当時の状況や子どもたちの思いに触れ、戦争や原爆の悲惨さだけでなく、思いがけず別の心配事のようなものが胸に迫りました。それは「和解」という言葉でした。今年はミサの時から、奉献文を通して感じていたことでした。



2026 年 江ノ口教会
平和旬間月間の様子

高松教区時代から、平和祈願ミサでは「ゆるしの奉献文二(人類の和解)」を使用してきました。今年は特に、この「和解」という言葉が強く迫ってきました。

責めたり断罪したりするのではなく、ゆるし、和解して共に歩むように、という呼びかけです。

ただ、子どもたちの詩を聞き、その思いに触れるうちに、和解への道のりの果てしない遠さと困難さに、改めて気づかされました。

見えてくるのは、人の頑なな心です。しかし神は、そのような人類を救い、和解の恵みを与えるために、御子をこの世に送られました。

聖パウロのフィリピの信徒への手紙には、

『キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、^{しもべ}僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。』と、世に遣わされた御子の姿が語られています。

私たちの救いと和解のために、ご自身を捧げものとして十字架に上られ、復活してその可能性を開き、共に歩んでくださる主を信じます。

「教会を全人類の一致の印、平和の道具として、光り輝くものにしてください。」という奉献文に合わせて祈り続けるよう、神から諭されている思いでした。



「外国にルーツがある子ども」たちの 学校をつくりたい

わたぼうし教室代表・フリーライター おおもと あさみ 大元 麻美

1990 年、日本の労働力不足を解消するための一助として入管法が改定され、海外在住の日系人を対象に「定住者」という新たな在留資格が設けられました。それに伴いブラジルなどから多くの日系人がデカセギに来て、仕事が軌道に乗り始めた頃に、母国に残してきた子どもを呼び寄せました。

そうした経緯の中で、一人の日系ブラジル人3世の児童が来日しました。当時 11 歳だったので小学校5年生のクラスで勉強を始めます。しかし、日本語が全く分からず、1日中座ったままです。

教師も、誰も助けてくれません。それどころか、いじめや差別にも遭い、徐々に不登校になり、やがて居場所を求めて暴走族の世界に入り、名を成すまでになってしまいました。

それから 36 年が経ち、教育現場では、自治体や市民レベルで地道な取り組みが続けられてきましたが、政府レベルでの決定的な解決策がいまだに提示されていないのが現実です。

海外からやって来る子どもにとって、日本の公立学校の大きな問題は「学齢主義」です。日本の公立小・中学校では、日本語が分からない子どもでも、11 歳なら小学校5年生に、14 歳なら中学2年生のクラスで学ぶことになるわけですが、授業はもちろん全然理解できません。日本では、学力が身に付かなくても、自動的に小学校も中学校も卒業してしまいます。ところが、いざ高校進学や就職を希望しても基礎的な学力がないため、かないません。何もできずに「貧困」状態に陥りやすくなります。また“反社会組織”に勧誘される可能性も高くなってきます。

「外国人学校に通えばいい」と考える人がいるかもしれませんが、外国人学校は「各種学校」なので、日本の文部科学省が認めた義務教育の卒業資格を得ることはできないのです。国際バカロレア認定のインターナショナルスクールや私立学校

は受験や学費の問題があります。こう見ていくと、日本に來たばかりの「外国にルーツがある子ども」たちに適した学校はないというのが実状です。

数年前、アフガニスタンから逃れてきた少年は、日本の学校に通い始めて、こうつぶやきました。

「僕、ゼロになったみたい」。言葉が分からないことで、いつもテストで零点を取り、自分の存在まで否定されたように感じていたからでしょう。その子はやがて精神的に不安定になってしまいました。

「外国にルーツがある子ども」たちは、言葉や文化の壁、差別や貧困にも直面します。そしてさらに、そこに「在留資格」の問題が加わります。在留資格がもらえない「仮放免」の子どもたちは、進学や就職ができない。強制送還される場合もある。しかし、どこで生まれ、どの国で暮らそうとも、すべての子どもには教育を受ける権利があります。子どもたちは教育を受けることができれば、必ず地域を支える大きな力になります。

私には、外国につながる子どもたちが無料で学べる“本物の学校”をつくるという長年の夢があります。その夢に向かって十数年前に横浜で学習支援活動「わたぼうし教室」を始めました。全国各地の日本の学校で困難を抱え、地域にも居場所がない「外国にルーツがある子ども」たちにとって、近くに学習支援教室などがあれば、どんなに大きな力になるでしょう。小規模の教室なら教会の建物などを利用して、また個人の家庭でもできるのではないのでしょうか。

子どもたちが生まれ育った国や家庭の事情によって未来が閉ざされることなく、自分の可能性を信じ、夢に向かって歩いていける社会を目指して、まずは目の前の一人の子どもを孤立させず、共に歩む仲間を増やしていきたいですね。

INTERNATIONAL DAY2026

～外国人が暮らしやすい社会は 日本人にも暮らしやすい～



熱中症を心配するほどの暑さの中、今年のインターナショナルデーも無事に終わりました。

午前のミサは 1500 人ほど、午後からのお祭りは 3000 人ほどの参加者があり、例年通り活気に満ちた一日となりました。

国際ミサの司式をお願いしたマリオ ^{やまの うち みち} 山野内 倫 ^{あき} 昭司教(さいたま教区)は、午後のステージからのあいさつで「こんなに楽しいお祭りを、関東でもできたらいいなあ」と話されました。

きっとマリオ司教さんは、そこにいる皆が、国籍や年齢に関係なく楽しんでいる姿を「楽しい」と感じられたのではないかと思います。自分を豊かに表現する外国人たちの唄や踊りは、観るものに一緒に楽しめる幸せを伝え、皆の体を自然に動かす魔法のようでした。

「外国人が暮らしやすい社会は日本人にも暮らしやすい」。排外の空気を許し、分断をあおっても何も楽しくないし、その未来が暗いのは明らかです。外国人と日本人が一緒に楽しめるお祭りとして、インターナショナルデーがこれからも続いてゆくように願います。



ボランティアさんの感想

* 今回初めてボランティア参加させて頂きました。私達はマッサージブースの受付で、ステージの真裏の特等席でした。皆さんのステージは、パワフルで観客の方々も歌ったり踊ったり、すごいエネルギーに圧倒されました。休憩の度に各国の料理を食べて、お腹いっぱいになりました。どんな国でもどんな地域でも、今日の様にみんなが笑って集える世界になれば良いと思います。ありがとうございました。(伊丹教会信徒)





* 朝 9 時に集合して沢山のテーブルやイスを配置する作業に汗を流しました。設営のほかマッサージの受付も担当し 15 人ほどの方々を案内するひと時もありました。準備の合間には大聖堂での御ミサに与かりました。聖堂は入りきれんばかりの人で溢れ国際色豊かな祈りに深く感動しました。

16 時過ぎからは日が落ちて暗くなる中で備品の片付けを行い、最後は代表者の挨拶をいただいて会場を後にしました。奉仕と祈りを通じて、国籍を超えた大きな共同体の一員として歩めた深く心に残る一日となりました。ありがとうございました。(明石教会信徒)



* 今日はインターナショナルデーで、タイムキーパーなどのボランティアをしました。時間を確認しながら進行をサポートするのは少し緊張しましたが、スムーズに進めるためのお手伝いできて良かったです。普段はなかなか

かできない経験ができて、とてもいい機会になりました。また、イベントはたくさんの人の協力によって成り立っているのだと感じました。今回の経験を通して、ボランティアの楽しさや大切さを知ることができました。(学生)



* 各国の踊りが素晴らしかった。文化を感じました。難民の仲間たちと一緒にボランティアできたことが何よりうれしかった。(イラン難民)

* とても楽しかった。

こんなに楽しいお祭りなら年に 2 回やってほしい。各国のお肉料理は美味しかったし、シナピスの直保子さんとダンスも踊れて、思い出に残る 1 日になった。(ガーナ難民)





依存症のチェックツール



玉造教会 たかはし 高橋 いくお 郁夫

アルコールやギャンブルなどの特定の物質や行為を、「やめたくても、やめられない」状態を「依存症」といいます。誰もがなり得る、自覚しにくい脳の病気です。

苦しさ、辛さを紛らわせるため、依存物質の摂取や行為を繰り返すことにより、社会生活に悪い影響が出て、やがて本人ばかりでなく周囲との関係も悪化していきます。

依存症かどうか、判断がつかねるという話をよく耳にします。

アルコール依存症の簡易チェックツールがあるので紹介しましょう。

CAGEといいます。

- (1) あなたは今までに、飲酒を減らさなければいけないと思ったことがありますか？
- (2) あなたは今までに、飲酒を批判されて腹が立ったり 苛立ったりしたことがありますか？
- (3) あなたは今までに、飲酒に後ろめたい気持ちや罪悪感を持ったことはありますか？
- (4) あなたは今までに、朝酒や迎え酒を飲んだことがありますか？

以上のうち2項目以上当てはまるや場合は、「アルコール依存症の可能性がある」と言われています。

ギャンブル依存症にも同様のチェックツールがあります。LOSTといいます。

- (1) ギャンブルをするときには、予算や時間の制限を決めない、決めても守れない。
- (2) ギャンブルに勝ったときに『次のギャンブルに使おう』と考える。
- (3) ギャンブルをしたことを誰かに隠す。
- (4) ギャンブルに負けたときにすぐに取り返したいと思う。

以上のうち2項目以上当てはまるや場合は、「ギャンブル依存症の可能性がある」と言われています。

あなたや周りの人に、依存症かもという不安を少しでも感じたら相談してみてください。苦しい病気です。

依存症になると悪循環が始まります。本人の状況とともに環境も悪化していきます。

そしてますます依存が加速してしまいます。

何度でも書きます。「依存症は適切な支援により回復できます」。



「私宅監置小屋」遺構の保存へ

公益社団法人沖縄県精神保健福祉会連合会(沖縄連)

会長 ^{やまだ けいご} 山田 圭吾

1900 年 「精神病患者監護法」制定

1918 年 精神病患者の実態調査報告「精神病患者私宅監置ノ實況及ビ其統計的觀察」(呉秀三^{くれしゅうぞう}医師)には、「わが邦十何万の精神病患者は実にこの病を受けたるの不幸の他に、この邦に生まれたるの不幸を重ねるものというべし」と記されている。「精神病患者監護法」によって、「精神病患者」を「治安維持」のために「私宅監置」せよとのことであるが、病に関する知識不足からくる不安感、そのことから起こる無理解、偏見から、社会の安寧を乱す恐れがあるとして、社会から排除するため、多くの精神疾患の方が医療を受けることもできず、地域から見えなくするために「座敷牢」や「監置小屋」に隔離されたのである。

住宅敷地内や、山奥、浜辺等の人里離れた場所に木やブロック等で頑丈に作られた小屋に閉じ込められ、劣悪な環境で豚や山羊と一緒に置かれたり、場合によっては手足を鎖で繋がれたりしていた。このように人としての尊厳さえも奪われたことを、「二重の不幸」と言われた。

1950 年 精神衛生法公布(精神病患者監護法と精神病院法廃止)。

精神病患者の置かれた「監置、隔離」状況はあまりにもひどく、呉医師に「精神病患者の救済・保護は実に人道問題にして、我が国目下の急務と言わざるべからず」と言われしめ、遂に「精神病患者監護法」は廃止され精神衛生法に繋がっていく。

1953 年 沖縄島北部に監置小屋設置 私宅監置があまりにも酷すぎるとのことで「精神病患者監護法」は廃止されたが、戦後、米軍の施政権下にあった沖縄では 1972 年の日本復帰までその適期間が続いたことから監置小屋が設置された。そのことから、「二重の不幸」以上に「沖縄に生まれたことで三重の不幸を背負っている」とも言われたのであった。

米軍統治下にあった沖縄での私宅監置は、保健所が窓口となり、琉球政府の行政主席が決裁して行なわれた。手続き書類には、主席の決裁印や担当者のサインが残されている。つまり、家族や地域の人びとが勝手に行なったものではなく、琉球政府の責任で、「治安維持のため必要である」などの理由で、行政手続きに則って行なわれた隔離だった。ハンセン病患者の隔離や障がい者への優生手術などと同様、社会制度がそれを許し、推し進めたことは紛れもない事実である。現代から見れば、偏見・差別に満ち、暴力的排除によってその人の人生を長期にわたり踏みしめる深刻な人権侵害、不法行為そのものである。

2026 年 3 月、精神障害者家族会全国組織が結成されてから 60 周年記念大会開催。全国精神保健福祉会連合会(みんなねっと)では、これまでの家族会が築いてこられた活動や精神医療保健福祉に関する大会を毎年開催している。今年 11 月の長崎大会では、日本に一か所だけ沖縄に残っている「私宅監置小屋」遺構の保存に向けて、映像や資料を展示して訴える予定。



ガザから問われていますー「あなたは平和ですか？」

シナピス運営委員 にしぐち 西口 のぶゆき 信幸

亡くなる直前までガザに語りかけ続けられた教皇フランシスコ、必要とされる人と共にいることを通して「誰ひとり欠けることがない」平和を実践され、教皇ご自身が「平和」そのものでした。

ガザの三年間は、聖地における「現代の受難」です。喪失への悲しみ、イスラエルの暴力への憎しみ、そして世界の無関心を装った無視への絶望がありました。最後の時まで受難は続きます。現実を見つめ「平和」でいるとは？……私たちは問われています。



消えゆく「ガザ」

ガザをGoogle earthで覗いて見てください。廃墟のガザを衛星画像で見ることができます。

「ガザ戦争」は「衝突」ではなく一方的な破壊と殺戮です。イスラエル建国前から西洋が奪ってきた最後の未開地が、歴史の聖地、パレスチナでした。

民族浄化の最後の時、目の前で子どもが引き裂かれ、肉片となり、骨が瓦礫の下に埋まっています。生まれた家、思い出の全てが焼き払われ、さよならも言えずに逃げるしかありませんでした。逃げ場もない中、繰り返された逃避行、古びたテントに突風と豪雨、そして灼熱の浜辺での毎日、恐怖と疲れ、飢えと渇き、寝るマットもなく、ゴミ山の狭間でネズミと蛇との生活、生きる気力を奪われ、極限の選択を迫られています。

「出ていくか、死ぬか」

忘れ去られる「ガザ」

豊かさを享受する西洋社会は、最初から今に至るまでずっと無視し続けています。逆に「パレスチナ実験場」でテクノ経済を権力と融合させたイスラエルの評価を高めました。最も罪が重いのが「中立」を装う報道です。

誰が本当の犯罪者なのか？

知っていても誰もそれを口にしません。

聖地の恵み「ガザ」

ガザと共に苦しみ、悲しみで過ごした3年、怒り、絶望で閉じていく自分を見つめる時でもありました。私自身が平和にいないのに、どうして世界の平和が実現するのでしょうか。

そのことを教えてくれたのは前月号で紹介したヒンドちゃんでした。ヒンドちゃんの救えなかった小さな命、でもスタッフたちは、逃げることなく辛い現実と共に苦しみ、最後の最後まで一緒にいました。それは時空を超えた、一致の交わり、永遠に向かう祈りの時だったのです。

「私たちの罪をお許してください。私たちも人を許します」と祈りを捧げます。スタッフと共に祈りのうちに十字架に引き上げられたヒンドちゃんは2万をこえるガザの子ども達と共に平和のうちに永遠に生きています。

1948年から続く受難の中で、国を持っていないだけで、何の罪もないパレスチナが罪人とされ、追われることになりました。

どこに希望があるのか、疑問を持ちます。しかしヒンドちゃんは全てを奪われても、「平和」だけは取り上げられない恵みであることを教えてくれました。この「平和」は連帯という大きな力を産みます。弱者を取り残して前進する歴史の中で、私たちキリスト者はそれに惑わされることなく、辺境の地に目を向け、耳を傾け、連帯しましょう。

人類史上、最も詳細に記録され、知られることになったガザの悲劇、誰も助けず、止めることもしませんでした。むしろ世界はAIによる戦争・監視技術を得たイスラエルの側に立つことを決めたのです。地球を滅亡に導くかも知れないAI新産業革命への危機感から教皇レオ14世は回勅を通して「人間の尊厳」の回復を願い、キリスト者は中立ではなく、弱者の側に立つことを宣言されました。私たちがいつも「平和」であるために、誰が私たちの隣人なのか、今改めて問われています。

事務局こぼれ話

あつこ
ビスカルド篤子

息子、消えてしまったよ

愛知県の佐藤さんには日系3世のひとり息子がいます。息子は若い時に一度だけ服役した経験があり、以来ずっと仮放免の身でした。

ある日、佐藤さんから電話を受けました。

「息子が入管に出頭したまんま帰ってこれから、入管に電話したけど知らないって。どこ行った、ってずっと探してた。したらば、さっき息子から電話あった。お母さん、強制送還されて飛行機無理やり乗せられた。今、イスタンブールだよ。これからサンパウロに行く飛行機乗せられるって。」

佐藤さんの息子は、毎月入管に出頭を続けて10年でしたから、その日もいつも通り所持金も殆ど持たず手ぶらで入管へ行きました。

佐藤さんは日系一家で、息子は幼少期から日本に暮らし、日本語しか話せず顔も日本人にしか見えません。所持金なしの56歳の日本人が、何の予告もなしにいきなり異郷の地に放り出されたようなものです。

私たちは教会を通じて現地で助けてくれる人を探しました。でもうまくつながらず、結局佐藤さんの息子は人に助けてもらうまで、丸4日間も飲まず食わずで空港にうずくまっていたといいます。救出された彼は病院へ運ばれました。

一方、日本に残された母親も悲惨です。息子に在留特別許可が出る日を待ち望んで母子で支え合ってきましたが、突然息子を失った母親は、悲嘆に暮れる間もなく息子が住んでいた場所へ杖を突きつつ片道2時間かけて何度も出向き、部屋の始末をします。

愛知県は車社会なので息子が母親を車でどこへでも送迎しましたが、今は往復5時間かけてヨタヨタと通院します。

「息子いないと生きてけないから、私ブラジル帰

るかなと思います。ブラジル？なんもないよ。どうする、わからないけど、日本で独りぼっちだもの、息子のそばにいて死にたいよ。」

日本人の血が流れている。家族とともに人生の殆どを日本で生きてきた。でもたった一度の過ちで服役したら、荷物も持てず家族に別れも告げられず、地の果てへ捨てられる。

こんな世の中だからこそ

国際協力に力を注ごう

佐藤さん母子の悲劇のなかで、教会の存在意義に改めて気づかされたことがあります。それは「助ける気持ちを大きく持てば、瞬く間に国境を越えて助け合う力は発揮される」です。佐藤さんの息子がどの航空便でいつブラジルに到着するのかを聞き、私たちはブラジル通の聖職者を通じてサンパウロの司祭を紹介してもらいました。

今回はアクセスに失敗しましたが、これまで何度も教会を通して人が助かった経験があります。

支援をお願いする時に大切なのは、「ブラジルで動いてくれるあなたへ日本の教会からせめてカンパをします」と礼節をわきまえる姿勢でしょう。「初めまして、あとよろしく」と丸投げして何の痛み分けもしなければ、「厄介な問題を押し付けただけ」です。つながった現地の人や教会を支援する具体策を示してはじめて「国境を越えた助け合いネットワーク」は成り立つし良い関係性が生まれるのです。

こんな世の中だからこそ、教会は力を発揮できるはずだと信じて、これからは国際協力の運動に力を注ぎたいとシナピスでは考えています。



緊急：映画「NAZA ナザ」10/24～

ネタニヤフ首相が最も恐れている映画。

標的 1 人の殺害に 500 人の <NAZA = 民間人の巻き添え> イスラエル軍兵士のインタビューから浮かびあがるのは、イスラエルが計算し尽くし、組織的に作り上げた、非人間化された<虐殺システム>だった。

このニュースが届く日まで上映が続いているかわかりません。

スケジュールをご確認のうえ、ぜひ足をお運び下さい。

2026 年秋

いのち・平和・人権部門のつどい

なぜ教会は、 社会問題にかかわるのか

11 月 28 日(土)13 時～16 時

会場：四国カトリック会館

お話：前田万葉大司教

講話後、たっぷりわかち合いを行います

当初、森山信三司教（大分教区）をお招きしておりましたが、都合により前田万葉大司教にお越しいただくことになりました。

詳しくは、同封のチラシをご覧ください



シナピスホーム（カフェ）
11 月の予定

カフェ：7、14、21 日

★土曜日の 13 時頃～16 時頃

場所：生野区中川 6 丁目 6-23

☎ 080-8940-8847

難民移住者と語り合おう！難民移住者がもてなすカフェを開催しています。

「ニュースレターの配布停止」、「点訳版の郵送」をご希望の方はシナピスまでご連絡ください。 ☎06-6942-1784

あとかき
スペースがない！ 時間もない！
モ〜ムリ！！（シナピス〜局）

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、
カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m

●車でお越しの場合

阪神高速 1 3 号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区

代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

